

## ヘブル人への手紙4章「安息に入る努め」

### 1A 安息に入るための約束 1-13

#### 1B 今日、語られているみことば 1-11

##### 1C 信仰に結ばれなかったみことば 1-2

##### 2C 天地創造の安息 3-5

##### 3C 約束の地の安息 6-8

##### 4C 神の民のための安息 9-11

#### 2B 力ある生きたみことば 12-13

### 2A 試みに同情される方 14-16

## 本文

ヘブル人への手紙 4 章を見ていきます。ヘブル人への手紙について、私たちは、二週間、時間が経ったのでおさらいしたいと思います。今、ユダヤ人の信者に著者は語りかけています。彼らは、ユダヤ人として、キリストを信じているがゆえに迫害を受けていました。ユダヤ人でキリストを信じている者たちも、そうでない人たちと同じように神殿で礼拝を献げていました。したがって、キリストの信仰の告白は控えておいて、そのままユダヤ人として生きていこうとしました。このような、キリストに対する信仰を曖昧にすることによって、彼らの救いの確信が失われてしまうという危機がありました。著者は、初めに信じた確信を最後までしっかり、堅く保ちなさいと警告します。

そこで著者は、ユダヤ人が大事にしている神殿礼拝について、それ以上に天における神殿が大事であることを説きます。そちらがまことの聖所であり、地上の祭司ではなく、そこに仕えておられる偉大な大祭司、キリストこそが私たちがより頼んでいくべき方なのです。それで、著者は、キリストが、ご自分の血で罪の清めを成し遂げた大祭司であり、神の右の座についておられる御子であることを書いています。「1:4 御子は罪のきよめを成し遂げて、いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれました。」

そして3章では、ユダヤ人にとって神のことばを授かり、イスラエルの家を治めたモーセを紹介して、キリストはモーセよりもさらにすぐれた、神の家を治めておられる方として話し始めました。ここで、問題が生じます。今、このように著者が、キリストのすばらしさ、この方がいかにすぐれたお方なのかを語っている中で、彼らが本気で、これらのみことばを聞いているか、信じて聞いているのか？という問いかけをしなければならなかったのです。それで、3章7節から、詩篇95篇を取り上げて、「今日、もし御声を聞くな、あなたがたの心を頑なにしてはならない。(7-8節)」というみことばを取り上げたのです。それで前回は、自分が不信仰の悪い心になって、生ける神から離れてしまうことがないように、という警告を読みました。

4 章は、その続きです。詩篇 95 篇の言葉を続けて、著者は解き明かしていきます。そこで改めて、その部分を読みましょう。ヘブル書 3 章 7 節から 11 節です。

<sup>7</sup> ですから、聖霊が言われるとおりに。

「今日、もし御声を聞くなら、

<sup>8</sup> あなたがたの心を頑なにしてはならない。

荒野での試みの日に 神に逆らったときのように。

<sup>9</sup> あなたがたの先祖はそこでわたしを試み、

わたしを試し、

四十年の間、わたしのわざを見た。

<sup>10</sup> だから、わたしはその世代に憤って言った。

『彼らは常に心が迷っている。彼らはわたしの道を知らない。』

<sup>11</sup> わたしは怒りをもって誓った。

『彼らは決して、わたしの安息に入れぬ。』

3 章は、イスラエル人たちが、エジプトから救われたのにも関わらず、御声を聞かなかったので、荒野で屍をさらしたということを話していました。みことばを聞いているのに、信じて聞いていないので、滅んでしまったのだということを話しています。

### 1A 安息に入るための約束 1-13

そして 4 章は、この最後にある部分、「彼らは決して、わたしの安息に入れぬ。」に注目しています。神の安息に入るとは何なのか？を見ていくのです。

### 1B 今日、語られているみことば 1-11

#### 1C 信仰に結ばれなかったみことば 1-2

<sup>1</sup> こういうわけで、私たちは恐れる心を持つてではありませんか。神の安息に入るための約束がまだ残っているのに、あなたがたのうちのだれかが、そこに入れなかったということのないようにしましょう。

救われることについて、恐れる心を持つてではありませんか、と呼びかけています。荒野の旅を歩いていた人々にとって、約束の地に入ることがその安息でありました。ヨシュアたちが約束の地に入り、それで戦いは止んだのですが、彼らが先住民を完全に追い出さなかったので、周囲の民が彼らを虐げるようになりました。戦いはまだ続きます。けれども、主が預言者サムエルを起し、それから王ダビデを立てました。そのダビデによって、ようやく周囲の民を制圧して、危害を加えられることなく安らかに住むことができるようになったのです。「Ⅱサム 7:1 王が自分の家に住んでいたときのことである。【主】は、周囲のすべての敵から彼を守り、安息を与えておられた。」エジプト

では虐げられ、そこから救い出されて、敵からも守られて住むことが安息と呼ばれています。

同じように、私たちがキリストによって、罪の虐げと、悪魔の攻撃から救われて、神の国における安息を得るというのが、私たちにとっての安息です。そして、「神の安息がまだ残っている」と言っていますが、この詩篇はダビデによって書かれています。荒野の旅からはるかに後のことです。五百年ぐらい後のことです。ですから、ここで言っている安息はまだあるのだということです。つまり、今の私たちにその安息が残されていて、それは救われて、天に入るという安息なのですが、万が一、そこに入れない人がいないようにしましょう、と言っています。3章で励ましあいなさいと進めていましたね。「3:12 あなたがたのうちに、不信仰な悪い心になって、生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。」

<sup>2</sup> というのも、私たちにも良い知らせが伝えられていて、あの人たちと同じなのです。けれども彼らには、聞いたみことばが益となりませんでした。みことばが、聞いた人たちに信仰によって結びつけられなかったからです。

イスラエルの人たちには、乳と蜜の流れる地が約束されているという良い知らせがありました。同じように、私たちには、キリストによって神の国に入るという良い知らせがあります。けれども、荒野の旅のことを思い出してください、と著者は言っています。彼らがなぜ、荒野で死に絶えたのか？それは、「聞いたみことばが益となりませんでした。みことばが、聞いた人たちに信仰によって結びつけられなかったから」ということです。

これは、強調してもしきれないほど、大事なことです。信仰を働かせてみことばを聞くのと、そうではなくて、みことばを聞くのでは、天地を分けるほどの違いがあります。信仰を働かせて聞くときには、御霊が語ってくださいます。聖霊が教師となって、自分を指導してくださいます。テサロニケの人たちのことを、パウロが第一の手紙で話していましたね。「2:13 こういうわけで、私たちもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたが、私たちから聞いた神のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いています。」

荒野の旅においても、主が共におられるということば、わたしがあなた方の前に行き、カナン人を追い払うと何度となく民は聞いていたのに、いざ、約束の地に入ろうとしたら、そこには巨人がいるということで、うろたえて、エジプトに帰ろうと言い出しました。けれども、ヨシュアとカレブは、主がともにおられるのだから、彼らはいちころだと訴えたのです。信仰によってみことばを聞いていたのか、そうでないかが、ここまで鮮やかに出てきたのです。信仰によって聞いていれば、そのみことばが働いています。そうでなければ、実を見ることができないのです。

ある人について、なんでこんなにみことば聞いているのに、こんなことをしているのだろうか？と首をかしげることがあるかもしれません。それは、信仰によってみことばが結びついていないからです。知識としては聞いているのかもしれません。けれども、信じて聞いているのです。

### 2C 天地創造の安息 3-5

<sup>3</sup> 信じた私たちは安息に入りますが、「わたしは怒りをもって誓った。『彼らは決して、わたしの安息に入れない』」と神が言われたとおりなのです。もっとも、世界の基が据えられたときから、みわざはすでに成し遂げられています。<sup>4</sup> なぜなら、神は第七日について、あるところで「そして神は、第七日に、すべてのわざを終えて休まれた」と言われ、<sup>5</sup> そのうえで、この箇所、「彼らは決して、わたしの安息に入れない」と言われたからです。

まず、「信じた私たちは安息に入る」と言っていますが、ここは現在進行形のようにして語られています。つまり「信じ続けている私たちは、安息に入っている」というようなニュアンスです。つまり、今、私たちは神の安息を味わっているということです。

それは何か？何をもって安息なのか？次に続くのは、神の安息の始まりである、天地創造の時の安息です。「創 2:1-3 こうして天と地とその万象が完成した。神は第七日に、なさっていたわざを完成し、第七日に、なさっていたすべてのわざをやめられた。神は第七日を祝福し、この日を聖なるものとされた。その日に神が、なさっていたすべての創造のわざをやめられたからである。」主が、創造の働きに疲れて休まれたのではなく、すべて創造が完成したので、それで休まりました。

つまり、完成のわざに留まることが安息の本質になります。主なる神は、天地創造の時にご自身が休まれた、その完成のわざの安息を、ご自身の民に救いの証しとして残しておられるのです。つまり、私たちが安息するというのは、イエス様が十字架の上で、「完了した」と言われてから息を引き取られたのですが、キリストにある神の救いの御業が完成したことを覚え、そこに留まる場所にある安息です。

私たちに備えられている神の安息を、今、十分に理解する必要があります。元々、安息日を覚えて、それを聖なるものとするという戒めは、「安息日を、お迎えする」という意味合いがあります。つまり、主は王としてすでにおられて、御座に着いておられて、そこに私たちお迎えします。イスラエルの人々が、六日働いて、それで七日目を安息日として造り上げるのではなく、すでに安息日があって、そこに自分たちが招き入れられるというものです。

そこに礼拝の極意があります。私たちは、何か自分たちが一生懸命、礼拝の準備をして、それで自分たちがいろいろな持ち物を持ってきて、それで献げるという意味合いがあるかもしれませんが、本来の礼拝はその逆です。主がすでに王として君臨しておられて、その統治の前に、私たち

が出て行って、ひざをかがめ、ひれ伏します。私たちが、今日は礼拝を献げるか、そうでないかというような選択の問題ではなく、すでに御座におられる主の前に、ひれ伏すのかそうでないかの違いなのです。

主は、すべてのことを成し遂げられ、すべてのことを行われています。「すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至るのです。この神に、栄光がとこしえにありますように。(ロマ 11:36)」私たちが立ち止まらなると、自分自身が何か事を行っていると思ってしまう。そうではなく、立ち止まることで、すべてのことが神から発し、すべてが神によって成っていて、神に至っていることを知るに至るのです。

そして救いについては、キリストにあってすべてが成し遂げられたというところに憩います。将来の救いが完成しますが、その将来の救いもキリストにあって、永遠のご計画の中ですでに成し遂げられているのです。私は、19歳の時にイエス様を信じましたが、その時に、「もうこれで死んでもいい」と思いました。それは、人生ってなんの意味があるの？と悩み続けていたところが、イエス様に出会って、すべて解決したからです。ですから、残りの人生は、その完成されたキリストの救いがどれだけ現れるのか、ということだけで、他に付け足すことは全くないからです。

### 3C 約束の地の安息 6-8

<sup>6</sup>ですから、その安息に入る人々がまだ残っていて、また、以前に良い知らせを聞いた人々が不従順のゆえに入れなかったので、<sup>7</sup>神は再び、ある日を「今日」と定め、長い年月の後、前に言われたのと同じように、ダビデを通して、「今日、もし御声を聞くなら、あなたがたの心を頑なにしてはならない」と語られたのです。

荒野の旅の時に、その地に入れずに安息に入れなかった人々がいました。しかし、主はその安息をまだ残しておられて、ご自分の民にそれを与えたいと願われています。信じることによって、与えられます。そのために、ダビデを通して、今、御声を聞きなさいと勧められたのです。

<sup>8</sup>もしヨシュアが彼らに安息を与えたのであれば、神はその後に別の日のことを話されることはなかったでしょう。

ヨシュアの時に、戦いからの安息が与えられていました。「ヨシュア 22:4 今あなたがたの神、【主】は、約束したとおりに、あなたがたの兄弟たちに安息を与えられた。」そして、約束の地では、自分たちが汗水流して収穫を得るのではなく、そこにある恵みによって豊かな収穫が与えられることも約束されています(申命 11:10-12)。しかし、そのことだけでご自身の安息を留まらせておられるわけではありません。神の安息は、その後の人々にも残しておられるのです。だから、ダビデを通して、「今日」という日を定められました。

#### 4C 神の民のための安息 9-11

<sup>9</sup>したがって、安息日の休みは、神の民のためにまだ残されています。<sup>10</sup> 神の安息に入る人は、神がご自分のわざを休まれたように、自分のわざを休むのです。

私たちは、自分で自分の救いを成し遂げるようなわざから、休みます。主がご自分の天地創造のわざを完成されて、キリストにある贖いのわざも、その永遠のご計画の中で完成されています。そこで、私たちは自分で自分を救う試みを、そのわざを休み、この方のうちに留まるのです。この方を感謝し、喜びほめたたえ、信仰によって生きるのです。

<sup>11</sup> ですから、だれも、あの不従順の悪い例に倣って落伍しないように、この安息に入るように努めようではありませんか。

ここで著者が語っているのは、将来の安息です。私たちが今、神の安息に入るだけでなく、将来、究極の約束に入る約束です。救いは主の目にあって完成しているのですが、その完成を見るのは将来です。私たちは、すでに救われているのですが、その救いの完成は未だ見ていません。安息はすでに得ているのですが、その実現は将来のために備えられています。

つまり、天であります。天におられるキリストご自身のところに行く安息です。私たちは、その時にこの地上でのわざから離れて、主のもとで休むことができます。キリストにある救い、その完成された救いはすでに私たちのものですが、この地上に残されている間、その救いの完成を自分のうちに実現するまで、じっくりと耐え忍び、主を待ち続けるのです。「ヨハ 14:2-3 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」

そこで、これまで警告してきた、不信仰の悪い心になって、心を頑なにして、聞いてきているみことばを台無しにしている人々は、この天における安息から落伍してしまう危険があるということです。だから、安息に入るように努めましょうということです。これは、主イエスに対する信仰を堅く保っていなさい、という勧めです。

#### 2B 力ある生きたみことば 12-13

それで著者は、みことばは聞いているけれども、信仰に結びけていない人々のことを思いながら、次のことを書いています。

<sup>12</sup> 神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。

神のことばは、ただ書かれた文字ではありません。神の息が吹き込まれている、生きた言葉です。このいのちによって、人々に救いをもたらしています。そして、力があります。神はご自分のことばで天地を造られて、イエス様はこのことばで、死んだラザロをよみがえらせました。ちょうどここは、著者は、イエス様が再び地上に戻ってこられる時に、世界の軍隊に対して行われることを考えているのかもしれませんが、ちょっと長いですが、読みます。黙示録 19 章 11-16 節です。

11 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確かで真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。12 その目は燃える炎のようであり、その頭には多くの王冠があり、ご自分のほかはだれも知らない名が記されていた。13 その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。14 天の軍勢は白くきよい亜麻布を着て、白い馬に乗って彼に従っていた。15 この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた。鉄の杖で彼らを牧するのは、この方である。また、全能者なる神の激しい憤りのぶどうの踏み場を踏まれるのは、この方である。16 その衣と、ものところには、「王の王、主の主」という名が記されていた。

ここに、イエス様が燃える炎のような目を持っておられることが書かれています。すべてを見通す目であります。その目を持って語られる言葉は、すべてのものを、心の思いやはかりごとを見分けることができます。それは、非常に鋭く、精密で、たましいと霊を見分けます。そして、関節と骨髄という、まるで外科手術の名医のように刺し貫くことができ、それで心の思いやはかりごとを見分けるのです。

私たちは、どうしても心や思いを隠しています。自分自身でもわかっていないでしょう。しかし、神のことばは、このようにして自分の思いやはかりごとを見分ける力を持っています。ですから、神のことばは大事なのです。福音は、すべてを見ておられる神によって裁かれることによって成り立っています。「ロマ 2:16 私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって、人々の隠された事柄をさばかれるその日に行われるのです。」そのように、心の思いが探られて、そのうえで、裸の自分がいて、そこでキリストが十字架にかけられて、その罪の身代わりの死を遂げられた、という神の愛が示されています。

しかし、心の思いとはかりごとが、ユダヤ教の神殿礼拝にこもることで、表に出てこなくなります。本当はキリストに対する不信から、生ける神から離れるようになっていて、それで心が鈍くなって、聞いても信仰によって聞いていないという事が起こっているのに、それを表面的には、ごまかせます。ちょうど、もっともなことを言って、もっともなふるまいをしているようにして、それで実は信仰から離れている人になっているのです。それで、みことばは人々の心を、霊とたましいの分かれ目さえも刺し通すのだと言っています。

ところで、「たましいと霊」ですが、霊というのは、私たちが神の御霊と触れる部分、交わる部分です。たましいは、もっと目に見えない私たちの一部です。何か、この教会はすばらしい、この賛美はすばらしいと言っていて、実は霊的ではないということがあります。その音楽のすばらしさで素晴らしいと言っているかもしれませんが。あるいは、雄弁な説教が語られて、心動かされたと言っているかもしれませんが。でも、実質は実によって見分けることができるのです。みことばは、霊を養いますが、私たちの感情や知性など、魂の領域のところを養っているわけではありません。

ネブカドネツアルが、自分を模した巨大な金の像を平野に建てたことがあります。そして、支配下にある者たちを皆集めて、盛大な奉獻式を行いました。そして、様々な楽器によるファンファーレが鳴り響かせて、それでひれ伏せと伝令官が命じます。「ダニ 3:7 それで、すべての民が角笛、二管の笛、豎琴、三角琴、ハープ、および、もろもろの楽器の音を聞いたとき、諸民族、諸国民、諸言語の者たちは、ひれ伏して、ネブカドネツアル王が建てた金の像を拝んだ。」そこで、ダニエルの友人の三人が伏し拝みませんでした。その時のネブカドネツアルは、怒り狂ったのです。そして彼らを、燃える火の炉の中に入れたのです。すばらしい音楽があっても、彼の思いは怒り狂ったのです。これが、キリスト者の間でも起こってしまうかもしれません。すばらしい賛美や音楽のように見えても、教会が生き生きとしているように見えても、霊的に見えても、反応が肉であれば、それは、たましいには訴えていましたが、霊には訴えていなかったのです。

ですから、私たちはたましいと霊を見分ける、神のみことばに養われて行く必要があります。

<sup>13</sup> 神の御前にあらわでない被造物はありません。神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。この神に対して、私たちは申し開きをするのです。

申し開きですが、これは、黙示録 20 章の最後で、白い大きな御座の前に、死んでいる人々がみなよみがえって、申し開きすることです。イエス様はこの時のことを思いながら、ご自身のことを知っている人の前に言う者は、父なる神の前と聖なる御使いの前で知っていると言われて、そうでなければ、知らないと言われてます。今、生きている時に人々の前でも、はっきりとキリストを告白している人は、最後の審判の時にも、「ああ、この人のこと、わたしは知っています。」と答えくださるのです。

## **2A 試みに同情される方 14-16**

<sup>14</sup> さて、私たちには、もろもろの天を通られた、神の子イエスという偉大な大祭司がおられるのですから、信仰の告白を堅く保とうではありませんか。

「さて」という言葉から、始まりますね。ヘブル人への手紙は、偉大な大祭司であるキリストをユダヤ人信者たちに語りながら、キリストから目を離してしまっていることを警告する言葉が、交互に出



できます。3章5節まで、イエス様がモーセにまさる、神の家をつかさどっている方として教えていましたが、そこで御声に聞きなさいという注意をしています。そして再び、大祭司なるイエス様の話に戻っています。

主は、「もろもろの天を通られた」とあります。天にはいろいろな天があることは、創世記1章1節で、「神は、初めに天と地を造られた」というときに、天は複数形になっているところからもわかります。空を見ていますが、その天もあり、そして宇宙もあり、それから、御使いたちがいるような天もあり、そして、神の御座がある天があります。もろもろの天を通られたというのは、そうしたところにある主権や力をはるかに超えて、いと高き方の御座のある天で、御座の右に着いておられることを示しています。

この方が神の御子であることは、1章で御使いたちよりもはるかにまさる方であるとして学びました。そしてその方が大祭司であられます。5章以降でさらに詳しく大祭司としての務めを教えてくださいます。ここでは、「信仰の告白を堅く保とうではありませんか。」ということです。キリストに対する信仰を心で秘めるとかではなく、しっかり告白をして、それを堅く保っているということです。そのためには、礼拝に集うことが大切です。日々の生活でキリストを心にあがめていることも大切ですが、私たちは集まって、イエスの御名を呼び求めています。この方が主であると告白している共同体です。

<sup>15</sup> 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでした、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。

イエスを主として告白しているのであれば、そこには苦しみがともないます。自分がキリスト者であることには、恥がともないます。けれども、そうした苦しみや迫害にあっても、肉体にある弱さに同情できない方ではない、というのがここで著者が言いたいことです。午前礼拝での説教をお聞きください、そこで詳しくお話しました。そして、ここで大祭司が弱さに同情できる存在として紹介していますが、それは次、5章の始まりで、大祭司は人としての弱さを持っている話をしています。

<sup>16</sup> ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。

私たちは、信仰の告白をしている中で弱まっている時に、また誘惑を受けている時も、主は必ずそこにいてくださいます。ご自身がその試みを受けてくださったからです。私たちはキリスト者人生で一度や二度、いやそれ以上、やっぱり信仰はやめておこうかな、という誘惑を受けたかもしれませぬ。けれども、それも主は知っておられます。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか?」と言われた主です。これほど弱さを身にまとわれた方ですから、自分の至らなさでは

なく、神のあわれみと恵みを受けましょう。そして、折にかなった助けを受けましょう。

そして、大胆に恵みの御座に近づくのです。もっともふさわしくないと感じる時、その時が、恵みによってふさわしいのです。